

専門教育と学業適応

——内発的動機づけと階層分化に着目して——

桑田 恵（東京大学教育学部）

◆要約

- ◎現在、生徒の学業適応をいかにして高めるかが喫緊の問題である。
- ◎生徒の学業適応は、出身階層の影響を受けることが指摘されている。
- ◎本稿では、まず上記事項を改めて検証し、加えて以下の2つのリサーチクエスチョンに関して検証を行った。
- ◎第1に、専門教育の持つ特徴は、生徒の内発的動機づけを高めうるか。
- ◎第2に、内発的動機づけは、学業適応における文化階層の影響を緩和しうるか。
- ◎分析の結果、リサーチクエスチョンは第1・第2ともに実証され、学業適応に対する専門教育の貢献が示された。

1 問題設定

本稿におけるリサーチクエスチョンは、第1に「専門高校の教育は、生徒の学習に対する内発的動機づけを高めうるか」、第2に「内発的動機づけは、生徒の学業適応における文化階層の影響を緩和しうるか」の2つである。

「内発的動機づけ」とは、新しいことを知り、身につけることに楽しさや面白さを感じ、そのために学習するという、主に教育心理学において用いられる概念である。これは、親や教師に言われるから、テストで高得点をとらなくてはならないからという外的要因による「外発的動機づけ」という概念と対比されることが多い。ここでまず、本稿での調査・分析において「内発的動機づけ」概念に注目し、導入した理由を述べる。

現在、主に18歳人口の減少傾向や、入試科目の削減、推薦入試・AO入試合格者の増加、

受験機会の複数化、「一芸入試」などの入試多角化から、かつてと比較して受験競争の緩和が顕著になってきている（荻谷 2001）。これらの影響を受けて受験競争の圧力が弱まれば、受験に合格するため、テストで高得点をとるためといった外発的動機づけによって生徒を学習へと向かわせることは、ますます困難になるだろう。このような状況下で、生徒を学習に向かわせるには、学習するという行為そのものに対する動機づけが必要になってくる。つまり、生徒の学習に対する内発的動機づけをいかに高めるかということが喫緊の問題であるということができる。よって、本稿における分析から、専門高校の教育に内発的動機づけを高める効果があることや、内発的動機づけの形成に効果を発揮する要素等が明らかになれば、それは社会の要請に応える知見となる。これが第1のリサーチクエスチョンとして検証すべき問いである。

第2のリサーチクエスションは、この内発的動機づけがなしうる貢献の可能性についての問いである。生徒を学習に向かわせることの困難さについてはこれまで述べてきた通りであるが、後に述べるように、現在、生徒の学力や教育達成における階層分化が大きな問題となっている。生徒たちを競争へと巻き込む圧力が低下し、受験戦争に向けた動員力が弛緩することで、学力や教育達成における階層間の不平等の拡大・顕在化の可能性が生じるのだ。生徒の学習意欲や達成度が出身階層によって決定され、さらに階層分化の傾向が拡大している状況下で、学習に対する内発的動機づけが文化階層の影響を緩和しうることが示されれば、階層分化に歯止めをかける手がかりがつかめることになる。専門教育の特徴が内発的動機づけを高めうることとあわせて実証されれば、実際に専門教育の特徴を教育全般に取り入れることで、生徒の学業適応の階層分化という社会問題の解決に貢献できるかもしれない。

本稿の構成については、以下の通りである。まず、本節で述べた問題設定に基づき、次節で先行研究の検討を行い、すでに得られている知見を踏まえ、3節において具体的な仮説を提示するとともにその説明を行う。そして、実際の分析で使用する変数について4節で説明を加えた後、5節でクロス集計を行い、その結果を示す。6節では、分析の結果をうけて、2つのリサーチクエスションに対する答えを提示し、専門教育が学業適応に貢献しうるということ、およびその考察や今後の課題について述べ、結論とする。

2 先行研究の検討

まず、本稿が「内発的動機づけ」概念を導入していることから、この概念に関する教育心理学の先行研究について述べる。杉村(1978)や桜井(1995)など、学習意欲とその動機づけについての教育心理学の研究では、学習に対する動機づけについて、どのように分類す

ることが適切か、内発的動機づけをはかる指標として何があるかといったことが主に議論されている。しかし、生徒の内発的動機づけを高めるための対策に関して、専門高校に着目した研究は、管見の限りではない。本稿では、先行研究で示された内発的動機づけの指標を導入しつつ、専門高校の教育が持つ特徴に着目し、分析結果を踏まえて、その特徴によって内発的動機づけの向上が見込めるかという点を検証する。

学習意欲や教育達成における階層分化については、苜谷の先行研究を挙げることができる。苜谷(2001)によると、受験という外的圧力の低下により、努力の階層差が拡大している。具体的には、専門職・管理職の父親、大卒の母親を持つ生徒は、努力の指標としての学習時間の減少が極力抑えられているのに対して、両親がマニュアル職や中卒の場合、生徒の学習時間の減少は大きくなっている。この学習時間の階層差は、1979年から1997年の18年間を通しておおむね拡大している。さらに苜谷は、児童・生徒の基本的生活習慣に着目して、これを社会階層の代理指標として分析を行い、基本的生活習慣が身についているかどうか、ペーパーテストで測定できる学力に及ぼす影響が強まっていることを指摘している(苜谷 2004)。すなわち、社会階層による学力の階層分化が生じているということである。また、1999年から2003年の4年間、2000年から2006年の6年間においても、学力の階層差は拡大していることが示されている(須藤 2008)。

本稿では、苜谷らによって示されたこれらの知見を踏まえ、内発的動機づけが文化階層の影響を緩和しうることを、そして専門教育の持つ特徴が内発的動機づけを高めうることを示す。つまり、内発的動機づけという概念を導入し、さらに専門教育との関連において分析を行うことで、内発的動機づけを高める具体的な方法や、階層分化の拡大を防ぐ方法につながる新たな知見が期待されるのである。

3 仮説

本節では、分析に使用する仮説を理由とともに提示する。仮説は以下の5つである。

●**理論仮説1**：専門高校の生徒は、普通科高校の生徒と比較して、内発的動機づけが高い。

○**作業仮説1**：専門高校の生徒は、普通科高校の生徒と比較して、学習自体に面白さ・楽しさを感じる傾向にある。

●**理論仮説2**：専門高校には、普通科高校と比較して、生徒の主体的学習参加を喚起する特徴がある。

○**作業仮説2-1**：専門高校には、普通科高校と比較して、創作実習を含む授業が多い。

○**作業仮説2-2**：専門高校には、普通科高校と比較して、共同作業を含む授業が多い。

○**作業仮説2-3**：専門高校の生徒は、普通科高校の生徒と比較して、授業で学んだことを学校外で活かす機会が多い。

●**理論仮説3**：専門高校の特徴によって、内発的動機づけが高められる。

○**作業仮説3-1**：創作実習を含む授業が多いほど、生徒は学習自体に面白さ・楽しさを感じる。

○**作業仮説3-2**：共同作業を含む授業が多いほど、生徒は学習自体に面白さ・楽しさを感じる。

○**作業仮説3-3**：授業で学んだことを学校外で活かす機会が多いほど、生徒は学習自体に面白さ・楽しさを感じる。

●**理論仮説4**：文化階層が高いほど、生徒の学業適応度も高い。

○**作業仮説4-1**：家庭の蔵書数が多いほど、生徒の勉強積極度も高い。

○**作業仮説4-2**：家庭の蔵書数が多いほど、生徒の授業満足度も高い。

●**理論仮説5**：内発的動機づけは、文化階層による学業適応の階層分化を緩和する。

○**作業仮説5-1**：学習自体に面白さ・楽しさを感じる生徒は、そうでない生徒と比較して、文化階層と勉強積極度との関連が小さい。

○**作業仮説5-2**：学習自体に面白さ・楽しさを感じる生徒は、そうでない生徒と比較して、文化階層と授業満足度との関連が小さい。

まず、理論仮説1～3について説明する。これらの仮説は、専門高校の教育には何らかの特徴があり、その特徴によって、生徒が学習自体に面白さ・楽しさを感じる傾向が出てくるのではないかというもので、第1のリサーチクエスション「専門高校の教育は、生徒の学習に対する内発的動機づけを高めうるか」に対応する。理論仮説1「専門高校の生徒は、普通科高校の生徒と比較して、内発的動機づけが高い」は、そもそも専門高校の生徒の内発的動機づけが普通科高校と比較して高いのかどうかを直接検証しようとするものである。そして、理論仮説1で検証する因果の背景として、専門高校の教育が持つ特徴を理論仮説2「専門高校には、普通科高校と比較して、生徒の主体的学習参加を喚起する特徴がある」で、その特徴が内発的動機づけにつながることを理論仮説3「専門高校の特徴によって、内発的動機づけが高められる」で検証する。作業仮説2で挙げた特徴は、専門高校のカリキュラムから導かれるものであり、これらの特徴から得られる達成感、学習した内容が実際に活用できる実感は、学習自体に面白さや楽しさを感じる要因になると考えられるため、理論仮説3が設定される。

なお、4節で示すように、本稿では内発的動機づけの指標として「おもしろい」「新しいことを知りたい」「生活するなかで役に立つ」の3つを用いているが、これらは杉村(1978)や桜井(1995)など教育心理学の文献において、内発的動機づけの一般的な指標

として用いられていることを踏まえたものである。

第2のリサーチクエスチョン「内発的動機づけは、生徒の学業適応における文化階層の影響を緩和しうるか」に対応するのは、理論仮説4「文化階層が高いほど、生徒の学業適応度も高い」、理論仮説5「内発的動機づけは、文化階層による学業適応の階層分化を緩和する」である。まず、仮説4において、生徒の学業適応が文化階層の影響を受けて階層分化していることを改めて検証する。階層分化に関するこの仮説は、以下の荻谷とBourdieuの先行研究を踏まえて設定されたものである。荻谷（2004）によると、学習意欲について、家庭での勉強の仕方、受けた授業、成績観といったいずれの項目においても、家庭の文化的環境の差が大きく出ており、その結果、文化階層下位の生徒たちほど学ぶ意欲が減退している。授業中の態度や授業への取り組みに関しても、同様に文化階層間の差が大きいことが指摘されている。加えて、Bourdieu（1979=1990）によると、文化階層が上位の子弟は学校の文化に親和的で、客観的な選抜において教育上の成功を勝ち取るのに対し、文化階層下位の子弟に関してはそうでない。すなわち、文化階層が高いほど、学習意欲も高くかつ学校文化に親和的であるので、勉強積極度、授業満足度も高いといえる可能性が高いのである。

文化階層によるこの階層分化を踏まえたうえで、内発的動機づけが文化階層の影響を緩和しうるかどうかを検証するのが仮説5であり、第2のリサーチクエスチョンのキーポイントである。仮説5が支持されれば、生徒の学業適応に対する専門教育の貢献が示されることになる。

4 変数の設定

本節では、分析に際して作成した変数について説明する。

①内発的動機づけ：Q10A「おもしろいから」

学習する、Q10B「新しいことを知りたいから」学習する、Q10C「生活するなかで役に立つから」学習するを加算し（「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「まったくあてはまらない」を1点として点数化）、合計点を「高い」と「低い」に2分割した¹。

- ②創作実習：Q4A「作業を通して何かを作りあげる授業」について、「ほとんどすべて」「半分より多い」を「多い」、「半分くらい」を「半分」、「半分より少ない」「ほとんどない」を「少ない」として3段階の変数を設定した。
- ③共同作業：Q4B「グループで協力して課題を達成する授業」について、「ほとんどすべて」「半分より多い」を「多い」、「半分くらい」を「半分」、「半分より少ない」「ほとんどない」を「少ない」として3段階の変数を設定した。
- ④学校外での活用：Q18D「授業で学んだことを、学校外で活かせる機会が多い」について、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を「多い」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「少ない」として、2段階の変数を設定した。
- ⑤文化階層：Q28（本の蔵書数）を利用した（マンガ、雑誌、学習参考書は除外）。「50冊くらい」以上を「上位」、「ほとんどない」「20冊くらい」を「下位」として2分割した。
- ⑥勉強積極度：Q9A「学校での勉強に積極的に取り組んでいる」について、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を「高い」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「低い」として、2段階の変数を設定した。
- ⑦授業満足度：Q7A「学校の授業に満足している」について、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を「高い」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「低い」として、2段階の変数を設定した。

5 分析

本節では、3節で提示した仮説について、クロス集計を用いた分析結果を示す。なお、仮説1、仮説2の分析にはウェイト1を、仮説3～5の分析にはウェイト2を用いた。

まず、作業仮説1「専門高校の生徒は、普通科高校の生徒と比較して、学習自体に面白さ・楽しさを感じる傾向にある」について検証する。表1は、学科と内発的動機づけの関係についてクロス集計したもので、専門高校の生徒は普通科高校の生徒に比べて内発的動機づけが高いことを示しており、仮説1は支持された。

では、専門高校の生徒の内発的動機づけがより高い要因はどこにあるのだろうか。その分析が仮説2と仮説3の検証に該当する。作業仮説2-1「専門高校には、普通科高校と比較して、創作実習を含む授業が多い」、2-2「専門高校には、普通科高校と比較して、共同作業を含む授業が多い」、2-3「専門高校の生徒は、普通科高校の生徒と比較して、授

業で学んだことを学校外で活かす機会が多い」は、生徒の主体的参加を喚起する特徴として挙げたものであり、専門高校にこれらの特徴がよりあてはまるとした。これらを順にクロス集計したものが、表2、表3、表4である。表2～4は、いずれも上に挙げた3つの特徴が専門高校のほうによりあてはまることを示しており、仮説2は支持された。

仮説3の検証では、作業仮説2で挙げた3つの特徴に内発的動機づけを高める効果があることを明らかにする。表5、表6、表7は、3つの特徴と内発的動機づけをそれぞれクロス集計したものである。順に、作業仮説3-1「創作実習を含む授業が多いほど、生徒は学習自体に面白さ・楽しさを感じる」、3-2「共同作業を含む授業が多いほど、生徒は学習自体に面白さ・楽しさを感じる」、3-3「授業で学んだことを学校外で活かす機会が多いほど、生徒は学習自体に面白さ・楽しさを感じる」の検証にあたる。

いずれの表からも、それぞれの特徴が強いほど内発的動機づけも高くなることが読み取

表1 「内発的動機づけ」×「学科」

学科 (2分類)	内発的動機づけ		合計	N
	高い	低い		
専門高校 (%)	59.3	40.7	100.0	(2,355)
普通科高校 (%)	45.6	54.4	100.0	(447)
合計 (%、参考)	57.1	42.9	100.0	(2,802)

0.1%水準で有意 p=0.000

表2 「創作実習」×「学科」

学科 (2分類)	創作実習			合計	N
	多い	半分	少ない		
専門高校 (%)	22.4	29.3	48.3	100.0	(2,337)
普通科高校 (%)	3.6	17.7	78.7	100.0	(446)
合計 (%、参考)	19.4	27.5	53.2	100.0	(2,783)

0.1%水準で有意 p=0.000

れ、仮説3は支持されたということが出来る。

次に仮説4の検証を行う。表8が作業仮説4-1「家庭の蔵書数が多いほど、生徒の勉強積極度も高い」、表9が作業仮説4-2「家庭の蔵書数が多いほど、生徒の授業満足度も高い」に該当する。これらの表から、文化階層が高い家庭の生徒ほど、生徒の学業適応をあらわすいずれの指標も高い値を示すことがわかり、仮説4は支持された。

最後に仮説5を検証し、内発的動機づけが、文化階層による生徒の学業適応の階層分化を緩和しうるかどうかを示す。

仮説5の検証に入る前に、そもそも内発的動機づけは文化階層の影響を受けているのではないか、という疑問について補足しておきたい。理論仮説3の検証で示されたように、専門高校の教育の特徴である創作実習、共同作業、学校外での活用は、内発的動機づけを高めうる。上記の問いに答えるためには、内発的動機づけに及ぼす影響の強さに関して、文化階層と、創作実習、共同作業、学校外での活用とを比較する必要があるだろう。

この検証を行うため、内発的動機づけを従属変数とし、創作実習、共同作業、学校外での活用ダミー、文化階層上位ダミーを独立変数として重回帰分析を行った。紙面の都合上、表は割愛し、以下に結果を記述する。文化階層上位ダミーの標準化偏回帰係数は0.106となり、内発的動機づけとの関係は有意であった。この結果は、確かに、文化階層上位の生徒ほど内発的動機づけが高いということを支持している。しかし、創作実習、共同作業、学校外での活用ダミーの標準化偏回帰係数の合計は0.382であり、文化階層上位ダミーの標準化偏回帰係数である0.106と比較すると、創作実習、共同作業、学校外での活用の影響のほうがより強いことがわかる。これらの結果から、内発的動機づけは文化階層の影響を受けるものの、創作実習、共同作業、学校外での活用の影響をより強く受けるため、それは可変的であるということができる。

では、ここから仮説5の検証に戻る。仮説4の検証において、生徒の学業適応をあらわす2つの指標と文化階層との関連を示した

表3 「共同作業」×「学科」

学科(2分類)	共同作業			合計	N
	多い	半分	少ない		
専門高校 (%)	11.5	25.9	62.5	100.0	(2,336)
普通科高校 (%)	2.7	13.0	84.3	100.0	(445)
合計 (%、参考)	10.1	23.9	66.0	100.0	(2,781)

0.1%水準で有意 p=0.000

表4 「学校外での活用」×「学科」

学科(2分類)	学校外での活用		合計	N
	多い	少ない		
専門高校 (%)	42.6	57.4	100.0	(2,359)
普通科高校 (%)	23.0	77.0	100.0	(447)
合計 (%、参考)	39.5	60.5	100.0	(2,806)

0.1%水準で有意 p=0.000

が、それぞれについて内発的動機づけで統制したものが表10、表11である。表10が作業仮説5-1「学習自体に面白さ・楽しさを感じる生徒は、そうでない生徒と比較して、文化階層と勉強積極度との関連が小さい」、表11が作業仮説5-2「学習自体に面白さ・楽しさを感じる生徒は、そうでない生徒と比較して、文化階層と授業満足度との関連が小さい」に該当する。

まず、表10より、内発的動機づけが低い層

においてのみ、文化階層による勉強積極度の階層分化が見られる。次に、表11から、授業満足度と文化階層の関係も、内発的動機づけが低い層においてのみ有意であることがわかる。

よって、表10～11より、内発的動機づけによって、文化階層と生徒の学業適応との関係が緩和されることが示され、仮説5は支持されたといえる。

表5 「内発的動機づけ」×「創作実習」

創作実習	内発的動機づけ		合計	N
	高い	低い		
	多い (%)	70.1		
半分 (%)	56.6	43.4	100.0	(611)
少ない (%)	46.0	54.0	100.0	(1,841)
合計 (%)	51.1	48.9	100.0	(2,760)

Q10A・B・C×Q4A
0.1%水準で有意 p=0.000

表6 「内発的動機づけ」×「共同作業」

共同作業	内発的動機づけ		合計	N
	高い	低い		
	多い (%)	71.3		
半分 (%)	56.0	44.0	100.0	(496)
少ない (%)	48.2	51.8	100.0	(2,086)
合計 (%)	51.1	48.9	100.0	(2,753)

Q10A・B・C×Q4B
0.1%水準で有意 p=0.000

表7 「内発的動機づけ」×「学校外での活用」

学校外での活用	内発的動機づけ		合計	N
	高い	低い		
	多い (%)	69.8		
少ない (%)	43.1	56.9	100.0	(1,913)
合計 (%)	51.4	48.6	100.0	(2,770)

Q10A・B・C×Q18D
0.1%水準で有意 p=0.000

表8 「勉強積極度」×「文化階層」

Q9A×Q28				
文化階層	勉強積極度		合計	N
	高い	低い		
上位 (%)	55.9	44.1	100.0	(1,016)
下位 (%)	48.5	51.5	100.0	(1,775)
合計 (%)	51.2	48.8	100.0	(2,791)

0.1%水準で有意 p=0.000

表9 「授業満足度」×「文化階層」

Q7A×Q28				
文化階層	授業満足度		合計	N
	高い	低い		
上位 (%)	53.8	46.2	100.0	(1,020)
下位 (%)	47.7	52.3	100.0	(1,759)
合計 (%)	49.9	50.1	100.0	(2,779)

1%水準で有意 p=0.002

表10 「勉強積極度」×「文化階層」×「内発的動機づけ」

Q9A×Q28×Q10A・B・C					
内発的動機づけ	文化階層	勉強積極度		合計	N
		高い	低い		
高い	上位 (%)	65.4	34.6	100.0	(590)
	下位 (%)	64.7	35.3	100.0	(825)
	合計 (%)	65.0	35.0	100.0	(1,415)
ガンマ係数：0.015 有意差なし p=0.787					
低い	上位 (%)	42.8	57.2	100.0	(425)
	下位 (%)	34.2	65.8	100.0	(929)
	合計 (%)	36.9	63.1	100.0	(1,354)

ガンマ係数：0.180 1%水準で有意 p=0.002

表11 「授業満足度」×「文化階層」×「内発的動機づけ」

Q7A×Q28×Q10A・B・C					
内発的動機づけ	文化階層	授業満足度		合計	N
		高い	低い		
高い	上位 (%)	62.3	37.7	100.0	(591)
	下位 (%)	63.9	36.1	100.0	(819)
	合計 (%)	63.2	36.8	100.0	(1,410)
ガンマ係数：-0.034 有意差なし p=0.541					
低い	上位 (%)	42.2	57.8	100.0	(429)
	下位 (%)	32.8	67.2	100.0	(921)
	合計 (%)	35.8	64.2	100.0	(1,350)

ガンマ係数：0.199 0.1%水準で有意 p=0.001

6 結論

ここまでの分析より、専門高校の持つ特徴によって、学習自体が面白い・楽しいと感じる内発的動機づけが高められること、そして、内発的動機づけは、生徒の学業適応における文化階層の影響を緩和しうることが実証された。すなわち、専門高校の教育は、このような効果を持つという点において生徒の学業適応にプラスの効果を与えるといえるだろう。

しかし、これらの結果は、普通科高校においても、専門高校の教育が有する特徴を取り入れることで同様の効果が期待できることをも示唆している。普通科高校で主に学ぶ5教

科のような知識は、確かに学校外で活かせるという実感を得にくいものであるが、創作実習や共同作業を含む授業を増加させることは、普通科高校でも可能であろう。

また、本稿の分析においては、専門高校の教育の利点のみが示されているが、たとえば専門高校における5教科の授業内容は普通科高校の3分の1程度に絞られるなど、進学を考える生徒が増加する中で、進学後に不利になる要因も存在する。つまり、本稿で得られた帰結だけでなく、他の様々な要因を加味したうえで、専門教育の効用を総合的に判断する必要があることに留意すべきであり、その検証は今後に残された課題である。

〈注〉

- 1 なお、加算に際してのアルファ係数は、専門高校で0.751、普通科高校で0.754であり、加算に問題はないと考えられる。

〈引用文献〉

- Bourdieu, Pierre, 1979, *La Distinction: Critique Sociale du Jugement*, Editions de Minuit. (=1990、石井洋二郎訳『ディスタンクシオン——社会的判断力批判』(I・II) 藤原書店.)
- 苅谷剛彦、2001、『階層化日本と教育危機——不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂高文社。
- 、2004、『『学力』の階層差は拡大したか』苅谷剛彦・志水宏吉編『学力の社会学——調査が示す学力の変化と学習の課題』岩波書店、127-52.
- 桜井茂男、1995、『『内発的動機づけ』『外発的動機づけ』を考える』『児童心理』金子書房、49(3): 20-7.
- 須藤康介、2008、『国際学力調査で見る中学生の学力——学習指導要領施行の前後で何が変わったのか』(<http://www2.crn.or.jp/blog/report/01/33.html>, 2009.3.31).
- 杉村健、1978、『授業と学習意欲はどうかかわるか——内発的動機づけと外的動機づけ』『現代教育科学』明治図書出版、21(8): 14-22.